

## テモテへの手紙第一1章「任された信仰の戦い」

### 1A 信仰による子への手紙 1-2

### 2A 違った教え 3-11

#### 1B 論議からの忌避 3-7

#### 2B 律法の適切な用い方 8-11

### 3A 神のこの上ない寛容 12-17

### 4A 信仰と良心の戦い 18-20

## 本文

テモテへの手紙第一を開いてください。私たちはこれまで、パウロによる教会に対する手紙を読んできました。ローマ人への手紙から、テサロニケ人への手紙です。ここテモテへの手紙の第一、第二と、テスへの手紙は、「牧会書簡」とも呼ばれるものです。これまでは教会全体にパウロが書いているのに対して、ここは教会の牧者また監督に対して個人的に書いているものです。

ところで、教会として礼拝を献げているみなさんは、牧会者がどのようなことに心血を注いでいるかをご存じでしょうか？教会では、いろいろなことが起こります。いろいろな奉仕があります。その中で牧者は、何を中心的に考えているか？は考えたことはありますか？

そのことを知るヒントになる出来事は、生まれたばかりのエルサレムの教会における出来事です。やもめの配給のことで、ギリシア語を話すユダヤ人が、ヘブル語を話すユダヤ人に対して苦情を出していました。ギリシア語を話すユダヤ人のやもめが、配給がなおざりにされていると訴えたのです。それで使徒たちは、給仕に仕える七人の人を選びました。そして、こう言っています。「6:4 私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」祈りとみことばなのです。祈りとは、教会というのはイエス・キリストの教会です。この方が主として支配されています。ですから、主に聞き、主に語るということが主目的になります。そして、一人一人、任された人々のために祈ります。

そして、みことばに専念するということです。エペソ 4 章でも、キリストが牧者また教師を立てたのは、「4:12 聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。」とあります。それは、「愛をもって真理を語る」ことによって成長ができることです(4:15)。私が、みなさん一人一人の生活をすべて知って、それで指導したり、世話をすることではありません。みなさんの生活のすべては、ご自身が信じている福音の真理から来ます。主との歩みは、これら真理から来ます。その真理を真理のままですべて語っていくことによって、キリストにあって成長します。ですから、牧会者は、神の真理を真理のまま、そのまま伝えて行くことに専念します。

私は、部外者の人や、教会を批評したい人々から、「明石さんは、この教会をどのようにしたいと思っているのですか？」と尋ねられます。私はいつも思うのです、ご存じなのはみなさんです。牧者からみことばを聞き続けていて、そこで御霊がそれぞれに語ってくださるところに基づいています。そして私も、みことばによって養い育てられ、成長していくみなさんの姿を通して、主が何を願っておられるのか、その語りかけを受けます。それぞれの教会に、主の立てられた監督を通して、キリストにある教会の形造りがなされていくのです。

そこで、牧者にとっての大きな務めは、「福音の真理を真理のままできつかりと保つ」ということになります。真理に対して、偽りの力がいろいろな形で挑んできます。そこから人々を守らないといけません。そして、教会に秩序と平和がなければいけません。父親が家の大黒柱として、家庭を秩序と平和のうちに守ると同じように、神の家を、真理の土台と柱によって守るのです。それが、テモテへの手紙とテスへの手紙の中心的な話題になります。

#### **1A 信仰による子への手紙 1-2**

<sup>1</sup> 私たちの救い主である神と、私たちの望みであるキリスト・イエスの命令によって、キリスト・イエスの使徒となったパウロから、

パウロは、自分のことを書いていますが、神とキリスト・イエスの命令による使徒だと言っています。父なる神ご自身のことを、「私たちの救い主」と呼んでいますね。パウロは、手紙の中で神の救いについて強調します。15 節に、「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」という言葉を書いていますし、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」と 2 章 4 節で書いています。イエス・キリストが救い主だけでなく、いや、父なる神ご自身が救い主であられ、その使命をご自分の御子に与えて世に遣わされました。

教会には、神が罪に対する怒りで満ちていて、その怒りをキリストに十字架の上で降り注いで、キリストが救ってくださったといわんばかりの言説があります。まるで、泥酔した父親が、子供に暴力をふるおうとしているのを母親がとめて、母親がその暴力を受けているかのように聞こえます。いいえ、父は御子を死に渡される時には、ご自身がその傷と痛みを受けておられたのです。独り子を愛してやまない父が御怒りを御子の上に置くことは、まさにご自身を傷つけるのと同じです。

そして、キリスト・イエスのことをパウロは、「私たちの望み」と呼んでいます。テモテにとっても必要な言葉です。周囲の状況を見れば、望み薄だったからです。彼が牧会をしているエペソの町は、異教と忌まわしい行いに満ち溢れていました。そして教会内には、違った教えが入って来ています。しかし、その中でも主イエスは変わらない方であることを知ります。

失望してしまう誘惑は、キリスト者として生きていると、また主の働きをしていると、いろいろな場

面で遭遇します。しかし、キリストこそが私たちの望みです。6章12節でパウロは、「信仰の戦いを立派に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。」と言って励ましました。キリストから、終わりの日に、この方が戻って来られる時に、いのちの冠を受けます。その時までしっかりと信仰を守っていなさいと励ましています。

そして、「命令によって、キリスト・イエスの使徒となった」と言っていますね。召されただけでなく、命令によって使徒となっています。パウロは、テモテへの手紙で数多く、命令とか、命じるという言葉を使っています。これは軍隊の用語です。上官が現場の兵士たちに命令を与える時に使う言葉です。信仰の戦いは、その名のおり「戦い」なのです。キリストの福音の働き人は、キリストの兵士でもあるのです。パウロは、司令官であるイエス・キリストから命令されて使徒となり、そしてテモテに対して、その命令を守るように命じています。そして、その命令を受け取ったテモテが、他の働き人たちにもその命令を伝達するのです。(Ⅱテモテ 2:2-3 参照)

命令を受けるとは、何かかなり窮屈のように感じるかもしれません。けれども、戦いの中では、実に慰めと励ましを受けることなのです。私自身、福音の働きで困難を感じる時に、主が命じられることを聞いて、魂に安らぎを得ることがよくあります。

教会においてもそうですし、去年の聖地旅行でもそうでした。情報の混乱や不条理と思われることがあった時に、私の心は怒りに満ちたのですが、結果を見ると、すべて大丈夫でした。問題だと思われていることが、結局、解決されていました。そして、車中でまた良からぬことを聞き、私は心を騒がせました。その時に、怒っている私を、主が怒られました。「わたしが真実であることを、あなたに何度見せたら、信じるのか？」と言われたのです。信じなさいというのは、命令でした。そして、戦っているのは自分ではなく、主ご自身であることを知って行ったのです。命令を受けるということは、言い換えると、「わたしに任せなさい」という主の確証なのです。戦うのは自分ではなく、主ご自身だということを知るのです。

<sup>2</sup> 信仰による、真のわが子テモテへ。父なる神と私たちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安がありますように。

なぜパウロが、テモテのことを血縁関係のない人なのに、「真のわが子」とまで呼んだのかを知っていきたいと思います。テモテが初めに出てくるのは、使徒の働き 16章です。彼の第二次宣教旅行が始まりました。パウロはシラスと共に小アジアを巡っていましたが、ルステラに行きます。こう書いています。「16:1 それからパウロはデルベに、そしてリステラに行った。すると、そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ人女性の子で、父親はギリシア人であった。」

父はギリシア人ですから異邦人です。けれども母がユダヤ人です。今のユダヤ教では母がユダ

ヤ人であれば子供はユダヤ人という定義ですが、聖書的に、また当時のユダヤ教では父がユダヤ人であればその子もユダヤ人ということでした。したがって、テモテは異邦人とみなされており、それゆえ割礼も受けていませんでした。それでパウロは、ユダヤ人に宣教する時に、そのことがかえって宣教の妨げになることのないように、彼に割礼を受けさせています(使 16:3)。

そして、母のほうは信仰を持っていると言っていますが、ということは、父は信仰を持っていなかったのではないかと思われれます。母とテモテ自身がどのように信仰を持ったかについては、使徒の働き 14 章でパウロがルステラに来ていることが記されています。パウロの第一次宣教旅行において、この二人が福音を信じたのでしょう。しかし、ユダヤ人としてしっかりと聖書を読んでおり、実に祖母からイスラエルの希望についての信仰を持っていたようです。テモテへの手紙第二を読むと、テモテは幼少のころから聖書に親しんでいたことが分かります(1:5,3:15)。そして、彼はパウロの宣べ伝える福音で、イエスこそがキリストであるという確証を得たのではないかと思います。そしてテモテは、それ以降、パウロと共にいて彼から神の教えを受けていました。したがって、エジプト人が父であったので、その代わり、信仰においてはパウロ自身が父のような存在になっていたのだと思います。

そしてテモテは、パウロの行けないうちに遣わされたり、またパウロが行った後にそこに留まったりしています。ピリピ人への手紙においての一例です。「2:19-23 私は早くテモテをあなたがたのところに送りたいと、主イエスにあって望んでいます。あなたがたのことを知って、励ましを受けるためです。テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、だれもいません。みな自分自身のことを求めていて、イエス・キリストのことを求めてはいません。しかし、テモテが適任であることは、あなたがたが知っています。子が父に仕えるように、テモテは私とともに福音のために奉仕してきました。ですから、私のことがどうなるのか分かり次第、すぐに彼を送りたいと望んでいます。」テモテは、パウロの信仰をしっかりと受け継いでいて、彼が奉仕するところは、まるでパウロが奉仕しているように、同じ思いになっていました。その他、手紙の差出人として、パウロは自分だけでなく、テモテを入れていることがいくつかあります。前回のテサロニケ人への手紙も、パウロの他に、テモテとシラスの名を連ねていました。

そして、挨拶の部分ですが、「恵みとあわれみと平安がありますように」とあります。他の教会に対する手紙では、「恵みと平安」となっていますが、「あわれみ」も書いています。パウロが、後で自分自身を神が救ったのは、憐れみによってであることを言及しています。パウロは、自分がとてつもない罪深い人間であるが、神の憐れみによって今の私になったことを書いています。神の奉仕にあずかる人に必要なのは、恵みも平安ももちろんなのですが、何よりも、憐れみなのだらうと思います。語弊を恐れずに言うならば、主から奉仕の務めに任じられているのは、かろうじてそうなのであって、神の憐れみなしには到底できない、その資格などないということです。

## 2A 違った教え 3-11

### 1B 論議からの忌避 3-7

<sup>3</sup> 私がマケドニアに行くときに言ったように、あなたはエペソにとどまり、ある人たちが違った教えを説いたり、<sup>4</sup> 果てしない作り話と系図に心を寄せたりしないように命じなさい。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、神に委ねられた信仰の務めを実現させることにはなりません。

テモテが今、監督しているのはエペソにある諸教会でした。「私がマケドニアに行くときに言ったように」と言っていますが、おそらく、これはパウロの第二次、第三次の宣教旅行の時のことではなく、使徒の働きの中で、パウロが皇帝の前で裁きを受けるためにローマで軟禁されていたことが書かれています。その後のことであろうと思われます。言い伝えによると、彼はその後、釈放されたと言われています。そして、エペソに戻り、それからピリピやテサロニケなどの町があるマケドニアに行ったのだと思われます。その時に、テモテはエペソに留まりなさいとパウロが命じていて、テモテは、このパウロの書き方だと、「逃げ出したい」と思っていたのではないかと思います。「あなたはエペソにとどまり」なさいと言っているからです。

違った教えを説いている者たちに、それをやめるように命じなさいと命じています。パウロの宣教旅行のことを思い出しますとエペソの教会には、多くの困難がありましたが、アジア全体に主のことが伝わった、宣教の本拠地となりました。覚えていますか、パウロは数多くのしるしを行いました。彼の持っている手ぬぐいさえ、それが悪霊を追い出すために使われました。魔術をしている者たちは、自分たちの本を燃やしました。そして、アルテミス神殿の模型を作っている銀細工人たちが、大劇場で騒動を引き起こしました。人々が神殿の模型を買わなくなったからです。

そして、パウロは、異邦人の諸教会の支援金を持っていくためにエルサレムに向かう旅をしました。その時に、旅を急いでいたので、エペソにいる長老たちを、自分の滞在しているミレトスに呼び寄せました。そして、こう言っています。「使 20:28-30 あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。私は知っています。私が去った後、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、容赦なく群れを荒らし回ります。また、あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくるでしょう。」もうすでに時間が経っていて、教会の中を荒らしている者たちがいたということです。それで、テモテをそこに留まらせて、これら違った教えを決してすることのないように命じています。

テモテにとって、エペソの町が困難な働きであることは知りに知っていました。パウロといつも共にいました。パウロの働きを受け継ぐことは、心理的圧迫になっていたでしょう。そして、彼は臆病でもありました。胃の病気にかかっていたことが、手紙の中からうかがい知れます。さらに、年が若いとも言われ軽んじられていました。それで、彼はエペソを出て行きたいと思ったのです。しかし、



テモテにパウロが按手した時に、聖霊の賜物が与えられて、預言が与えられたようです。それで、エペソに留まるのは、その神の召命があるのだからみこころなのだと言って、励ましているのです。

この「違った教え」ですが、「教え」という言葉はギリシア語で「教えがまとまったもの」という意味があります。体系的な教えのことで、しばしば「教理」とも呼ばれます。私たちの教会では、これを「新しい信者の学び」の中で学んでいます。パウロはテモテへの手紙、またテトスへの手紙の中で、「健全な教え」「健全な言葉」というものを強調しています。人が健全に育つ、という時に使うような健全であります。極端にならない、バランスを崩さない、言い換えればキリストに倣っていく者になっっていくことであります。

しかし、「違った」教えを伝えている者たちがいたのです。この「違う」というのは、異質なものの、性質の異なるもの、という意味合いがあります。福音やキリストの教えと呼んでいられるけれども、到底、福音ではない異なる教えのことです。ガラテヤにある教会に対して、パウロがこう言いました。「ガラテヤ 1:7 ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたを動揺させて、キリストの福音を変えてしまおうとする者たちがいるだけです。」これは律法主義ですが、使徒ヨハネが第一の手紙を書いた時は、グノーシス主義の異端についてこう言いました。「2:19 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。」これまで仲間だと思っていたところが、違った教えに引きこまれて、その信じていることが変質してしまったために、離れていく、ということが起こります。

その内容は、「果てしない作り話と系図」ということです。作り話とは、事実に基づかない話で、憶測で物事を議論していきます。それに対して健全な教えとは、神の確かな約束を信じる信仰によって論じていきます。そして「系図」については、聖書にあるユダヤ人の系図がありますが、そうした系図を使って、いろいろな憶測を立て、作り話をしていたようです。ユダヤ教の律法主義はもとより、それからギリシアのグノーシス的な考えも混在していたと思われます。この手紙の最後で、「6:20 間違っ、て、「知識」と呼ばれている反対論を避けなさい。」とありますが、この知識がギリシア語で「グノーシス」です。

現代にも、憶測でいろいろなことを語る教えは、教会の中でも巷に溢れています。私たちの教会にもやってきます。最近のは、ある人が初めはメールで何通も送ってきます。ついに、何十枚もの文章を、勝手に送りました。郵便ではないので、この教会まで来たということです。これを信じなければいけない、受け入れなければいけないと主張します。すべてごみ箱に捨てました。そして、個人的に脅しも受けたことがあります。そうした人々に共通しているのは、教会には通っていないことdす。あるいは通っていても問題が牧師には気づいていません。もしそうでなければ、その教会や団体自体が、おかしくなっている事例もあります。

はっきりしているのは、「論議を引き起こすだけ」なのです。信仰の建て上げになっていないのです。一見、正しいことを言っている、騙されないようにしてください。その人のしていることから、良い実が結ばれているか試してください。避けてください、付き合わないようにしてください。

<sup>5</sup>この命令が目指す目標は、きよい心と健全な良心と偽りのない信仰から生まれる愛です。

パウロが、テモテにもテスにも強調していることは、ここのことです。きよい心です。純真な心と言ったらよいでしょうか。イエス様を愛する真っ直ぐな心です。そして、健全な良心とあります。パウロは、良心という言葉は何度となく、テモテとテスに書いています。私たちが善悪を知るための物差しになるのが、良心です。何度も偽っていると、ちょうどやけどをした後に触覚がなくなってしまうように、良心が麻痺してしまいます。正しい良心を持てているかどうかを試してください。主からの確信と平安をもって受け入れられているかどうかを確かめます。そして、偽りのない信仰です。信じていると言いながら、自分自身を偽るということがないように。そして、偽りのない、真実な信仰は、必ず愛を生み出します。結局、愛と信仰と希望なのです。それが目標になっているのが、健全な教えであり、健全な教えには、必ず敬虔にかなった行いが伴います。

<sup>6</sup>ある人たちはこれらのものを見失い、むなしい議論に迷い込み、<sup>7</sup>律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、確信をもって主張している事柄についても理解していません。

この空しい議論をしている者たちは、律法に関わる教えを持っているのですが、その確信をもって主張している事柄でさえ、理解していないとあります。論争や空しい議論が、キリスト者の間に起こるのですが、大抵ほとんどの場合、その語っている本人たちが、その内容を分かっていません。ですので、そういった議論に迷い込まないように気を付けてください。そういった人々の知識は豊富なので、「なぜこんなにも聖書に通じているのに、分からないのか？」と思います。いいえ、知識と知恵は異なるのです。知恵は、主を恐れるところから始まりますが、主への恐れがありません。

## 2B 律法の適切な使い方 8-11

ところで、パウロは律法については、ガマリエルの下、厳格な教育を受けてきました。そして、律法については、非の打ちどころがないほどだとピリピ書 3 章で話しています。その彼が、律法とは何であるかを次に話しています。

<sup>8</sup>私たちは知っています。律法は、次のことを知っていて適切に用いるなら、良いものです。

律法そのものが悪いものではないのです。ロマ 7 章で、「律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです。」とあります(12 節)。

<sup>9</sup> すなわち、律法は正しい人のためにあるのではなく、不法な者や不従順な者、不敬虔な者や罪深い者、汚れた者や俗悪な者、父を殺す者や母を殺す者、人を殺す者、<sup>10</sup> 淫らな者、男色をする者、人を誘拐する者、嘘をつく者、偽証する者のために、また、そのほかの健全な教えに反する行為のためにあるのです。

律法の適切な用い方は、正しい者のため、つまり律法を守り行い、それによって義と認められるためではなく、正しくない者のためにあります。イエス様が、来られたのはそのためであり、律法を守り行っていない者たちと食事をしておられた時に、「ルカ 5:31-32 医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」と言われました。ここに書かれているのは、あらゆる不法についてですが、シナイ山でモーセが受けた十戒に、ことごとく違反しているものばかりです。

律法について、旧約聖書には、教えと定めのある働きがあります。教えは、基準や標準を示しています。定めは、その教えを裁き司、つまり裁判官が判定する時の材料となります。イスラエルの民が、国として、共同体として生きて行くために、そこにある秩序を守るために、悪がはびこらないように抑制することです。例えば、モーセは離婚状を出しなさいと言いましたが、それは離婚を推奨しているのではなく、離婚に至ってしまった時に、離縁された女が守られるようにしなければいけないという、好き勝手に離婚するのを抑制するためでした。それでイエス様は、もともとは違うのだ、神は男と女に造られて、二人が一体となるようにしているのだと教えられました。

そうした悪の抑制の他に、すべての人が救い主を必要としているという、人間の根源的な必要を示すものであります。それは、イスラエルの国民ができる以前の、アダムが犯した罪から始まるものです。イエス様は、神の国が近づいていると宣べ伝えて、それで山上の説教と呼ばれる説教で、律法学者やパリサイ人が教えていることではなく、律法にある本質を教えられました。例えば、殺してはならないというのは、人を殺したら殺されなければいけないという死刑だけではなく、それ以上に、兄弟のことを馬鹿と言ったり、相手がいなくなってしまうばよいとする心の姿勢、憎しみを取り扱っている、ということです。

それで、どんな人であっても、正しく見える人であっても、実は神の前でははっきりと罪人であることを、律法によって明らかに示されるのです。「ガラ 3:24 こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。」キリストが、律法の真髄になる部分を行われました。そして、キリストが十字架につけられましたが、それは律法に違反した時の要求である死を、ご自身が受けてくださることによって、その要求にも応えられたのです。したがって、律法のことについてあれこれ議論していることは空しいことであり、キリストにあって律法が成就しているところを見ないといけなのです。



<sup>11</sup> 祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、そうなのであって、私はその福音を委ねられたのです。

パウロは、律法を宣べ伝えるのではなく、福音を伝えたいと願っています。神がいかに祝福に満ちておられるのかを知っています。そして、そこには恵みの栄光に輝いています。エペソ人への手紙には、その冒頭が、祝福に満ちた神の栄光の福音が、雄弁に説明されています。「エペ 1:3-6 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方において私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられました。それは、神がその愛する方において私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。」神が、いかに祝福を私たちに満たしたいかがわかりますね。そして、それは恵みの栄光に満ちています。恵みとは、全く受けるに値しない祝福を受けることです。

### **3A 神のこの上ない寛容 12-17**

そしてパウロは、いかにして自分が救われたのかについてテモテに語ります。そして、それがいかに恵みに満ちていて、神の憐れみによって自分が使徒となっているかについて話します。

<sup>12</sup> 私は、私を強くしてくださる、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。キリストは私を忠実な者と認めて、この務めに任命してくださったからです。

パウロは、自分が強くなるのは、主ご自身が恵みによって強くなるのであって、自分自身から出していないことを話しています。テモテにも第二の手紙で、「2:1 キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。」と教えています。自分の頑張りで強くなるのではなく、主の恵みを受けて行くことによって強くなるのです。

そして、「キリストは私を忠実な者と認め」と言っていますが、ここが誤解しないように、注意深く理解する必要があります。これはパウロが、何か忠実な行いをしてから認めてくださった、ということではありません。そうではなく、パウロが何もしていない時に、いや、むしろ福音の働きを妨げ、それを滅ぼそうと気が狂ったようにキリスト者を迫害しているその時に、イエスが彼を、異邦人に福音を届ける使徒として任命されたのです。主イエスが、サウロ(パウロ)がダマスコに行って、そこにいるキリスト者を縛り上げようと息巻いていた時に、現れたのです。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」と語られました(使徒 9:4)。そして、その場で回心したサウロについて、弟子アナニアに、「あの人は、わたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。(15 節)」と言われたのです。何もしていない時に、いやイエスを迫害していた時に、

彼は忠実な者と認められたのです。これを、恵みと言わずして何なのでしょう！

ここの「忠実な者と認め」たという言葉は、「みなした」「数えた」と訳してよいのです。信仰によって義と認められた、というのと同じように、神を信じているからこそ、それだけで忠実な者とみなしてくださっている、ということです。信じがたいことですが、それが真実です。神が恵みによって忠実な者として選ばれ、そして事実、その忠実さが明らかにされていきます。それは、神の良い行いが、その人に予め備えられているからです。

<sup>13a</sup> 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。

これがパウロの姿でした。先に、9-10 節で律法は正しくない者のためにあると言いましたが、それはまさに自分自身の姿だったのです。彼がまさにそれでした。また十戒には、主の御名をみだりに唱えてはならない、とありますが、キリストの冒瀆するように仕向けました。まさにユダヤ教テロリストです。彼の証言を使徒の働きで読めます。「22:4 そしてこの道を迫害し、男でも女でも縛って牢に入れ、死にまでも至らせました。」と言っています。律法の義を追い求め、自分の義で神に認められようとして、結局、人を殺す、神を冒瀆するという大罪を犯したのです。律法の適切な使い方については、彼の実体験の裏付けがあるのです。

<sup>13b</sup> しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。

憐れみを受ける、というのは何か？これだけの罪人は、神の報いを受けなければいけません。神は正しい方であり、罪に対して罰を下さない方ではありません。しかし、神は同時に情け深い方です。神はとてつもない寛容をもって、このような罪を見逃してくださったのです。「信じていないときに知らないでしたこと」というのは律法に基づいた発言で、律法には知らずに犯した罪に対する規定と、故意に罪を犯した場合の罰則が書かれています。知らずに犯した罪は、いけにえを献げることにより赦されます。パウロはこのことを話していますが、イエス様ご自身が十字架の上でこの罪について祈られました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。(ルカ 23:34)」パウロも、自分で何をしているのかが分からなかったのです。

<sup>14</sup> 私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。

神の憐れみを受けただけでなく、恵みは満ちあふれていると言っています。憐れみは、正義に従えば受けなければいけない罰を受けなくて済むように、神はそれを控えてくださったことを意味します。恵みは全く受けるに値しない神の祝福を受けるようにしてくださった、ということです。この恵みが、ますます満ちあふれると言っています。

そして、どのようにして恵みが満ちあふれるのでしょうか？「キリスト・イエスにある信仰と愛とともに」とあります。そうです、キリスト・イエスに対する信仰があって、初めて恵みが溢れます。そして主イエス・キリストがおられることを信じていれば、主ご自身の愛がそこにあるので、愛も流れてきます。このようにして恵みの洪水があり、その洪水は信仰というものによって流れるようになり、そして信仰には愛も伴います。

<sup>15</sup>「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

午前礼拝の説教をぜひ聞いてください。パウロは、この純粹で素直な福音の真理をそのまま受け入れていました。それから逸らすのが、違った教えであり、避けなければいけないものです。そして、パウロは罪人の筆頭であると告白しています。彼は、自分が激しい熱情を持って、キリストの弟子たちを打ち叩いたり、死に至らせたことを、トラウマのようにして思い出していたかもしれません。ですから、罪人の中でも自分はそのかしらなのだと言っています。

<sup>16</sup>しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。

ここが、私たちキリスト者が、しっかりと耳を傾けなければいけないことです。私たちの信じてる福音は、神の恵みの福音です。パウロのように、神の前には決して立てないのに、それでもイエス様が上ない寛容を示して永遠のいのちを与えてくださる方なのです。パウロが救われるのだから、どんな罪人も救われるのだということを示すために、先ずパウロをこのように救ってくださったということなのです。

私たちにはどうしても、神に用いられている人は、それだけ良い行いを神の前に果たしているからそうであって、自分はそこまで神に近づけないと思込んでしまいます。それは福音ではありません。全く逆です。恵みによって救われるのだということ、その用いられている器を通して知ります。私が、自分の犯した罪のことを思うと、日本で教会の奉仕の務めをすることはだめだと思っていました。しかし、カルバリーチャペル・コスタメサにいた時、その逆になってしまいました。そこで奉仕をする人々の話をきくと、目を丸くするような過去を持っている人々で満ちていました。何度となく離婚した人。元、麻薬常習者は何人もいました。そして、人生の半分以上を牢屋で過ごした人もいました。しかし、今はキリストの愛で満ちあふれています。もちろん、そうした行いから離れています。しかし、それは自分の頑張りではなく、こんなにも罪深い者を主が救ってくださったという、喜びに満ちあふれているからです。

牧者のチャック・スミスが語っていたことを強烈に覚えています。「イエスにとって、私が大切な

者であると同じように、あなたがたもイエスにとって大切なのです。」私は、チャックが神にとても近くて、私はずっと遠くに離れたところにおいて、それで満足していました。ところが、そのイエス様が、自分にもものすごく近づいてくださったことを知ったのです！これが良き働き人の例です。良き働き人は、その人がいかにすぐれているかを示すことではなく、その働きによって、イエス様がいかにすぐれているかを示す、導くことのできる人です。

<sup>17</sup> どうか、世々の王、すなわち、朽ちることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

神の恵みに感動して、パウロはここで、神に賛美を献げています。ちょっと難しい言葉を使うと、頌栄と言います。賛美をしながら祈ることです。イスラエルで、ユダヤ人でありながらイエス様を信じている人と交わりました。クリスチャンの祈りは、父なる神に対して祈ることが主だけれども、ユダヤ人は、王に対して申しあげている祈りを多く献げると言っていました。なるほど、です。ここでも、この方が、世々の王と言っています。そして、朽ちることがありません。いつまでも変わらない方です。そして目に見えるものは移りすぎますが、この方は目に見えませんが、そして、神々と呼ばれるもの、主と呼ばれるものは数多くありますが、この方は唯一の神です。この方に、誉れと栄光が、今だけでなく、世々限りなくありますようにと賛美し、祈っています。

#### **4A 信仰と良心の戦い 18-20**

<sup>18</sup> 私の子テモテよ。以前あなたについてなされた預言にしたがって、私はあなたにこの命令を委ねます。それは、あなたがあの預言によって、信仰と健全な良心を保ち、立派に戦い抜くためです。

先に話しましたように、パウロは主からの命令をそのまま、テモテにも命令として与えています。具体的に、エペソでの働きをしていたパウロが、主からの命令にここでも従いなさいとしています。司令官が部下に指示を与えているのと同じです。それは、テモテが働き人として召された時、按手した時に受けた預言に基づくものです。手紙の後半部分でパウロは、「4:14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある賜物を軽んじてはいけません。」と言っています。

私たちが賜物というと、何か自分に与えられた新たな能力だというように、ときめくかもしれません。以前、若い時に、教会で、賜物の発見といって、性格判断をするようなシートが渡されたことがあります。こんなものではありません。むしろ、主から与えられた賜物は、困難に感じて、自分でやめたいと思うようなところで、発揮されます。主にある働きは、困難がある時にその真価が試されます。伝道の賜物を受けている人は、伝道の実が見えないようなところで、それでも語ります。人に慈善を行う賜物がある人は、いろいろ世話しても、感謝されないどころか、かえって悪態をつかれるような時に試されます。しかし、それでも主に対して忠実である時に、賜物が輝くのです。それ

は恵みの現れであり、主は確かにあなたを通して働かれていることを人々は知るので。

「信仰と健全な良心を保ち、立派に戦い抜くため」と言っています。信仰の戦いです。しかも、健全な良心を保つ戦いです。このことによって、すべてが変わると言ってもよいでしょう。キリスト教会も全てが変わりました。たかが良心、されど良心です。私たちは聖書を神のことばと信じるプロテスタントの教会ですが、ルターは、帝国議会において自分の著作での主張を撤回しなさいと問われた時に、こう答えました。「聖書に書かれていないことを認めるわけにはいかない。私はここに立っている。それ以上のことはできない。神よ、助けたまえ<sup>1</sup>」与えられている健全な良心を保ったのです。パウロも、異邦人に対する神の救いについて、神の恵みについて、どんな迫害を受けても、良心から決して譲ることはありませんでした。それで、今の私たちがいるのです！

良心は、みなさんが恵みによって、一人一人に既に与えられています。それを、怪しい教えによって、麻痺されることがないように気を付けるのです。その純粋な心が、汚されないように気を付けるのです。信仰と健全な良心に対する戦いは、身近な人から来るかもしれません。いや、身近な人から来るから、その戦いは熾烈なのです。純粋に信じていて、キリストの愛を知ったのに、そうではない不純物が押し付けられることがあります。その人を批判していながら、自分自身も同じようになっていることがあります。まさに、汚されるのです。

<sup>19</sup> ある人たちは健全な良心を捨てて、信仰の破船にいました。<sup>20</sup> その中には、ヒメナイとアレクサンドロがいます。私は、神を冒瀆してはならないことを学ばせるため、彼らをサタンに引き渡しました。

健全な良心を捨てた人を、船で嵐によって破船したことに喩えています。ヘブル 2 章 1 節では、「私たちは聞いたことを、ますますしっかり心に留め、押し流されないようにしなければなりません。」と言っています。ここでは船の漂流に喩えています。漂流して、破船してしまうのです。それから守られるためには、健全な良心をしっかりと保っていることです。それが錨となって、私たちが漂流から守ってくれます。

そして、具体的に名指していますね。この手紙は、テモテという教会の指導者に対する、個人にあてたものであることを思い出してください。この人物がそうだということは、普段は話しません。けれども、信仰の戦いをしている時には、責任関係、信頼関係のある仲間には情報を共有していく必要があります。ここでは、一人はヒメナイですが、第二の手紙の中で再びパウロは言及します。「Ⅱテモ 2:17-18 その人たちの話は悪性の腫れもののように広がります。彼らの中に、ヒメナイとピレトがいます。彼らは真理から外れてしまい、復活はすでに起こったと言って、ある人たちの信仰をくつがえしています。」復活がすでに起こったと言っています。こういった話は、悪性の腫物の

---

<sup>1</sup> Here I stand; I can do no other, so help me God!



ように広がると言っていますが、そうですね、どんどん広がる性質を持っているので、私たちは警戒する必要があります。そして、アレクサンドロですが、同名の人物が再び第二の手紙に出てきます。「4:14 銅細工人のアレクサンドロが私をひどく苦しめました。その行いに応じて、主が彼に報いられます。」パウロをひどく苦しめたとあります。主の働き人に暴言を吐いたり、ひどく苦しめるといことは、怒ります。これは、被害を受けた人たちが感じる以上に深刻なことです。復活が起こったという教理的な逸脱にしても、ひどく苦しめるとい行いによるものにしても、それは、ここにあるように「神を冒瀆」していることになります。

そして、「サタンに引き渡しました」と言っています。この表現は、コリント第一の、近親相姦を犯している者に対しても使われています。「I コリ 5:4-5 すなわち、あなたがたと、私の霊が、私たちの主イエスの名によって、しかも私たちの主イエスの御力とともに集まり、そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」具体的には、教会の交わりからその者を断ち切ることです。教会の中において、罪を悔い改めないで、自分のしていることを知るために、その霊的守りから外すことを意味します。教会外において、サタンの影響をもら受けて、自分のしていることが何かを知ることができるようにするためです。そして、その罪を憎んで、自ら罪から離れることを期待します。そのための戒めです。ここでも、「学ばせる」と言っています。彼らを永久追放するのが目的ではなく、学習する、教訓を得るようにすることが目的です。

以上ですが、どうか、信仰の戦いを、健全な良心を保つ戦いに従事してください。いいえ、もう既にしているのです。今日の学びは、すでに戦っていることを、完徹してくださいという勧めです。